

編纂に當つて韃靼の文字を用ゐることを忌諱したのである。然しながら事實は事實として記さなければならぬから、乃ち改字省字の法を創めたのであるが、韃靼はもと達怛と書き、南宋以後の書に於て韃靼と書かるゝに至つた。元來韃という字は北宋の中葉までは無かつたもので、此の字は即ち鞞字に關係し誤つて革扁を付けられることになつたものである。所で遼金の史料中には韃靼とか達怛とかの諸字が錯出したであらうし、中には之を倒して怛達とか鞞韃とかに作つたものもあつたであらう、此の倒置の形は極めて阻鞞の二字と似てゐる。當時の史料中には或は一二誤つて此の倒置の形を阻鞞と書き又た之を省略して阻卜と書いたものもあつたであらう。そこで元の史臣は其の誤を利用して遂にその誤らざるものをも此の形に改めて、一時の忌諱を避けたものに外ならぬと思はれる。遼史の聖宗紀に於て只だ一ヶ處だけ達且なる字を存して居るが、これは史臣等のうっかり改むるに及ばなかつたものか、それともこゝに間隙を存して置いて、後人の考定を待たうとしたものであるかも知れないといふにある。

自分は王氏の論述の明快に敬服する。敬服すると同時に此の問題に就いては誰の考も大概同一の所に歸着するものだと知り、別にまた我が學界の外人に知られざるを痛嘆^{||}といふよりも外人が我が學界を注意せざる事の多きを惜まざるを得ない。本年初頭の史林に於て桑原博士は「支那に於る印刷の起原」を論じたカーター氏が日本人の著書論文に注意を拂はなかつたことを遺憾とし、それによつて生じた論述の瑕疵をも惜まれたが、カ氏をしてあの苦言に發憤する壽命を享樂せしめなかつた無常を嘆ずるものは、日本の學界に緣故の淺からざる我が王氏に對して、次の諸篇の存在を告知することを咎めないであらう。一體此の問題は當時の歴史研究に従事する誰もが逢着する所であつて、決して新しい疑問ではない、従つて松井學士^①は契丹可敦城考附阻卜考に於て、ついで箭内博士^②は韃靼考